

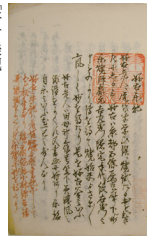
新資料紹介 『内電秘書』（初代乾山口述二代筆記）…合冊本『樂秘傳 好古樂記 淇水軒』中の一書（都立中央図書館 加賀文庫）

このたび見出し出した「初代乾山口述二代筆記」の陶法書である。「内電秘書」とあるが、内容、その他から行方知れずであった二代乾山次郎兵衛筆記の写本

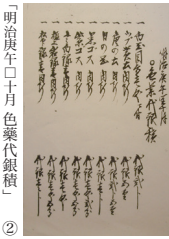
と判断。書写は近藤安治郎、「乾山焼法」「明和三年」さらに「宝暦十年」とあり、江戸における乾山焼内窯陶法、釉薬・絵具などの調合を伝える。



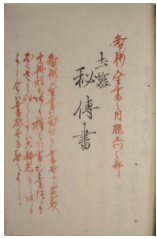
『樂秘傳傳 好古樂記 淇水軒』表紙①



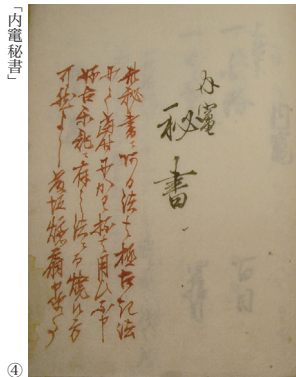
『好古樂記』



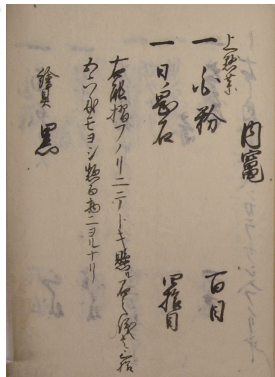
『明治庚午口十月色樂代銀積』②



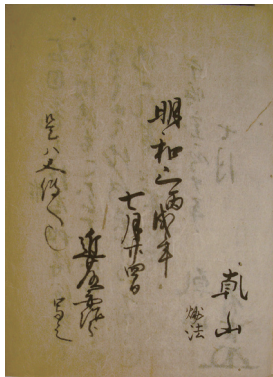
『智術全書之内磁工門之部 土器 秘傳書』③



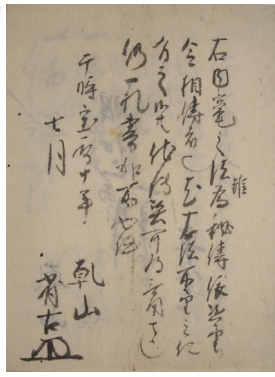
『内電秘書』



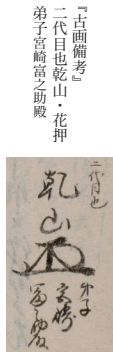
『内電秘書』上懸樂・絵具の調合



『乾山焼法』「明和三丙戌年七月廿四日近藤安治郎写之」



『千時・宝暦十年七月乾山省古・花押』



『古画備考』
二代目乾山・花押
弟子宮崎富之助殿

初代乾山には二冊の自筆陶法書が現存する。『陶工必用』『陶磁製方』である。

そのうち内寮陶法に関しては上葉・絵具を抜萃、享保一七年、書状を以って佐野の素封家大川顕道へと送り、顕道は手控『陶器傳書』にそれを記録。一方、江戸入谷村には二代乾山次郎兵衛がおり、乾山の口述を筆記、のちに「初代口述二代筆記」とする陶法書を認めた。「古画備考」によれば同書は明和三年三月三代宮崎富之助へと渡り、菊庵筆「乾山世代書」によればその後酒井抱一・西村貌庵・三浦乾也へと伝承が、度重なる災難に遭遇、今日、消失したものと考えられている。が、このたびその写本を加賀文庫（都立中央図書館）に見出した。

内容、奥書、年紀・書者の花押型、『古画備考』の記載事項によって二代乾山次郎兵衛筆記陶法書の写本であると判断したが、同書は、合冊本『樂燒秘傳・好古樂記』淇水軒（縦一九二葉、横一六〇葉）中の一冊である。①『樂燒秘傳・好古樂記』②『色樂代銀積』③『土器秘傳書』（百工秘術）磁工門の写本④『内窰秘書』（初代乾山口述二代筆記）以上の四部から成り、明治三年（一八七〇）記「色樂代銀積」を含むことから、成立は明治期であろうと考える。表紙下方には「淇水軒」とある。

淇水軒は『樂燒秘傳・好古樂記』を纏めた藤垣爐扇・俗名小林源兵衛、天保時代の俳人である。

爐扇は「好古」を評し、「俳諧・書・画に妙、自樂と稱し一己之奇人なり」と記し、ともに俳諧、樂焼を娛しみ、同書を纏めたと述べる。好古老人は樂吉左衛門隠宅手代紋右衛門より樂焼を習得。同書には土・下地拵え・素焼・赤葉・白葉、また樂焼以外の繪葉・上葉、磁器に関する事項もあり、刊本『百工秘術』（享保九年刊）の抜萃書写を含むなど、江戸後期以後に盛行する素人陶芸家・陶法書類の特質を示す。

『内窰秘書』冒頭の爐扇の言葉は朱書である。此の秘伝は極めて古く、今日用いることはいないと述べ、代わりに『樂燒秘傳・好古樂記』に記載した別法を勧めるがあるが、ビードロを用いない絵具はもはや古いと記す。時代の需めか、繪画的絵付も少なく、古式の風趣を伝える絵具を使いこなす技能も不足か。江戸では俳諧・浮世絵・歌舞伎が盛行し、時代は俄に結果を求める即興・即席の風潮に溢れていた。

『内窰秘書』は内寮陶法、「初代口述二代筆記」の写しである。内容は二冊の乾山自筆伝書、顕道手控『陶器傳書』にほぼ一致、乾山自慢の豊後土の記載もあり、奥書「乾山焼法（異筆）明和三丙戌年七月、末尾に加えられた「宝曆十年七月乾山省古」花押型などにより、江戸入谷村乾山焼二代次郎兵衛筆「初代口述二代筆記」の写本であると考ええる。

（先号にて好古を爐扇の号としたことは誤りである。訂正いたします）